

ふは、正月の別名といふべし、郭璞曰、以日配月之名也といへり、又攝提貞於孟陬と離騷といふも、正月の事也、正月を曰孟陬と元帝纂要いひ侍るも、離騷によりしなるべし、又曰孟陽、上春開春、發春、獻春、首歲、獻歲、發歲、初歲、肇歲、方歲、華歲と上同、また正月律名あり、これを太簇と拾芥抄いひ侍るも、其音角律中太簇と月禮記いへるによられしなり、太簇の義解は、劉熙釋名、班固白虎通にくはしく辨あり、ゆへにこゝに略せり、又芳春、青春、陽春、三春、九春と元帝纂要みえたれども、あながち正月の月におつるにもあらずして、春の三月をすべていへる名目とおしはからる、さてまた正月を一月と書る物、ふるくよりみえたり、附説曰、正月者、古文尙書云、一月也と玉燭寶典、見え、また漢書表亦云、一月、鷄鳴而起と上同、みえたれども、是正月を一月といふべからざる證あり、杜預春秋傳注云、人君即位、欲其體元以居正、故不言一年一月とみえたるぞ、正しき據とすべし、故に和漢ともに、人君即位の年をさして、元年とさだめ、年月のはじめをさして、正月といふ、

〔日本書紀神武三〕辛酉年春正月ムツキ

〔日本書紀通證神武八〕正月ムツキ、生月也、謂發生之初、正韻歲之首月也、垂加翁曰、

〔萬葉集五〕梅花歌三十二首并序略○中

武都紀多知、波流能吉多良婆、可久斯許曾鳥梅乎乎利都々、多努之岐乎倍米、大貳紀卿

〔古今和歌集春一〕二條の后のとう宮の御息所ときこえける時、正月三日、おまへにめして、おほせごとあるあひだに、○中
ふんやのやすひで略○歌

〔秘藏抄上〕十二月異名 正月むつき略○中 さみどり月

〔莫傳抄〕十二月異名 暮新月 正月略○歌、略、 年初月 同

〔藏玉和詩集〕十二月異名後鳥羽院御時、十二月異名にて、歌を被召時、歌付花鳥、雖有歌無用之間、略之、 正鸞 初空月 霞初月 初春

月○歌、略、
下○同、略、